

日本肝胆膵外科学会
 会員 各位

理事長 遠藤 格

平素より本学会に格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

本学会の設立当時の理念は日本の高い研究力と素晴らしい診療成績を世界に向けて発信すること、高難度手術を安全に市民に提供できる体制を構築することでした。後者については高度技能専門医制度の設立、修練施設認定制度と監査体制などを立ち上げ、高難度手術の死亡率を2%から1%に下げることができました。これからもさらなる改善を目指していきたいと思っております。

そして前者の世界へ向けての研究発信力です。こちらも英文機関誌 Journal of Hepato-Biliary-Pancreatic Sciences(JHBPS)の創刊、Observership 事業、各種ガイドライン・規約の制定とその英語版の出版などを行って参りました。そしてアジアの肝胆膵外科医とともに ASHBPS や A-PHPBA の創設の中心となってきました。その原動力は日本の肝胆膵外科医の皆さんの情熱だったと思っております。世界へ向けての存在証明の宣言とでもいいでしょうか。

このような学会ですから、英語化は自然な流れだったように思います。10年前になりますが、2012年5月30日の理事会で当時の高田忠敬理事長が、『本学会は、Globalization を目指し、本学会理事長として、英文雑誌を発刊し、今後は、本学会学術集会の英語化を目指すこととする』と宣言されました。そして2017年A-PHPBAとの合同開催であった第29回学術集会時に完全英語化を目指したというわけです。

そのための方策としては、国際シンポジウムなど積極的に導入する。スライドやポスターの英語化などを進める。外国人の参加を促すために、外国からの参加者には参加費を免除するなどの措置を考える。また、シンポジウムなどは積極的に外国人を座長に登用する。特に、韓国、台湾の国際プロジェクトの委員を積極的に取り込む工夫をする、とされました。

その後、第26回では約42%、第27回では62%、第28回では93%が英語化されました。第28回は思い返しても画期的な学会であり、権雅憲会長のもと、海外招聘者は43名、Travel grant 対象者は42名にのぼり大変国際的な雰囲気を感じました。

そして続く2017年の第29回ではAPHPBAとの合同開催で完全英語化を達成し、会自体も参加者2,487名を数え大成功しました。

学会としては完全英語化以降、毎年会員の皆様にアンケートを実施してまいりました。完全英語化プロジェクトから5年が経ちましたので、その結果をお示しいたします。

	満足	やや満足	合計
第30回(327名回答)	57(17.4%)	52(15.9%)	109(33.3%)
第31回(424名回答)	46(10.8%)	97(22.8%)	153(36.1%)
第32回(320名回答)	35(10.9%)	75(23.4%)	110(34.4%)
第33回(251名回答)	28(11.1%)	61(24.3%)	89(35.5%)
第34回(304名回答)	23(7.5%)	73(24.0%)	96(31.6%)

※第34回学術集会後アンケート結果は下記HPより閲覧いただけます。

http://www.jshbps.jp/modules/meeting/index.php?content_id=2

『満足+やや満足』は約3割で一定です。増えてはませんが減っていません。
なお、英語化を目指してからの10年間の理事会で出されたご意見を議事録から拾ってみますと、『上級演題は海外からの演者が1名でもいるとやる気ができるのではないか』『トラベルグラントを多く出し、最低でも50名程度、その参加者にポスターセッションにかならず入っていただく』『PAMの大成功は英語化の効果である』などです。

一方で、『教育セミナー、ガイドライン関係は日本語で行う方針』『プレゼンのあとのディスカッションについては、上級演題はすべて英語で行うが、要望演題のディスカッションは日本語でも良いのではないか』とのご意見も出されています。

また、英語化は若手から、というご意見もあり、江口晋理事の発案で英語プレゼンの技能向上を目指した“若手医師のための英語発表トレーニングセッション”を第35回から始めることになっています。さらに、広報委員会では、学会集会のイチオシ発表をYouTubeやインスタグラムで流し海外から参加したい方を増やすなどの方策も考えていただいています。IHPBAやAPHPBAに積極的に関わっていくことで、日本の、そして本学会のプレゼンスを高めていきたいと考えております。

日本の肝胆膵外科領域の研究成果や手術戦略、高難度手術の技術、あるいは近年長足の進歩を遂げている低侵襲手術の技術を学びたいと感じている肝胆膵外科医は世界に多くいるはずです。PAMの成功はそのことを実感させます。一方で、肝胆膵外科は日々進歩しており世界のどこかで新たなコンセプトや技術が開発されています。異文化や多様な価値観の出会いと理解を通じて、生まれる新たな進歩があると確信しています。文化や価値観を超えた友情に基づく国際交流は、必ずや次世代の肝胆膵外科医の育成に繋がるものと信じます。コロナ禍が長引き、国際交流が困難に感じられる今こそ、日本肝胆膵外科学会は国際的に開かれた学会を目指して努力していきたいと思います。

以上の経緯で、直近の理事会では、英語化を続けていくこととなりました。しかし、英語で学会をやって何の意味があるのか、と言う会員の根強い疑念に答えるようにしたいと思います。完全英語化計画が発足して10年経ち、達成してから5年が経ちました。いずれにしましても、本件は継続して将来検討委員会で議論すべきと認識しております。

これからも本学会の発展のためご協力のほどよろしくお願い申し上げます。